

平成 27 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -4- 』

2015 年 10 月 20 日 (火) 第 3 回

「フランス語を通して見える「世界」」

東京外国語大学講師

秋廣 尚恵

はじめに

みなさんこんばんは、初めまして。私は東京外国語大学フランス語講師の秋廣尚恵と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、「フランス語から見た『世界』」という題目で以下の 2 つのポイントについてお話をしたいと思います。

1 つ目はまず、フランス語を話している国や地域です。

地球上のどのような地域でどのようにフランス語が話されているかという点について見ていきます。またそれぞれの地域で話されているフランス語が持つ特徴についてお話しします。

それから 2 つ目として、フランス語という言語によって表現されている現実世界の在り方、そして、フランス語の言語構造についてお話ししたいと思います。

もちろん「言葉」イコール「現実世界」ではありません。言葉というのは現実世界を表している一つの手段でしかないわけですから。しかし、フランス人は、日本語とは異なった視点で、フランス語というものを通して現実世界を捉え、表現しているということを多少なりとも知って頂ければありがたいと思います。

1. フランス語の話されている国や地域

1.1. ヨーロッパにおけるフランス語話者の総数は？

まず、フランス語の話されている国や地域というものをまず概観してみたいと思います。世界でフランス語を話している人数はどれくらいいるのでしょうか？

「フランス語圏国際機構」(Organisation Internationale de la Francophonie) の行った最新の統計調査(2014 年)によれば、フランス語を日常言語として話している話者の総数は 2 億 740 万人です。世界で 5 番目に多くの人に話されている言語です。

英語や中国語の話者数に比べればそれほど多いわけではありません。しかし、これから、ご覧になっていただくように、フランス語は、実は非常に広い地域、範囲で用いられ、また、日常言語だけでなく、通商や公的な場でもよく使われており、英語に次いで多くの学習者によって学ばれている国際的な言語です。

さて、これから地域ごとにフランス語圏を見ていきましょう。まず、ヨーロッパにおけるフランス語話者の総数はおよそ 8000 万人と推定されています。フランス語を母語かつ公用語として使用している国は、フランス、モナコ公国です。モナコはちょうどフランスのニースの隣にあり、フランスの中にモナコが入り組んだ形で入っています。また、フランス語をいくつかの公用語のうちの 1 つとして使っている国として、ベルギー、スイス、そしていわゆるルクセンブルク大公国があります。また、イタリアのヴァルダオスタ州もフランス語を公用語として使っています。さらに公用語というよりは、地域言語の 1 つとしてフランス語を使っている国がアンドラ公国です。フランスとスペインの国境沿いにあるピレネー山脈のスペイン側にある小さな国です。この国では公用語はカタルーニャ語ですが、地域言語としてスペイン語とフランス語を採用しています。このようにヨーロッパのフランス語圏の多くは複数の言語を公用語、あるいは地域言語として認めている多言語国家なのです。

1.2. 海外県・特別領土・海外領土

フランスはかつて植民地政策をとっていました。そして、未だにカリブ海に浮かぶグアドループやマルティニーク、ブラジルのすぐ隣の仏領ギアナ、インド洋のレユニオン島、マイヨット、それから仏領ポリネシア、ピエール・ミクロン島。オセアニアのウォリス・フツナ、加えてサン・マルタンやサン・バルテルミー島というように、非常に世界のあちこちに海外県、あるいは海外準県というものが残っています。海外県ほどの影響力は及ぼしていないものの、特別領土として、ニューカレドニアがあります。これらの地域ではフランス語が話されています。またさらに非居住地域ではありますが、仏領南方という海外領土を南極の方に持っています。

フランスでは、フランス本土のことをフランス語で、*France Métropolitaine* と言います。海外県は自治権は有して居ますが、フランスとの結びつきが比較的強く、フランスの議会へ議員を送ることができるほか、社会保障や教員資格なども共有しています。社会的にもフランスの影響は強いと思います。これらの地域では学

校教育がフランス語で行われています。

レウニオン島、それからグアドループ、マルティニークあたりから来た人のフランス語を聞くと、現地のローカルな言葉であるクレオールとフランス語との間の言語接触があるために、フランス本国のフランス語と語彙や言い回しが違うということではありますが、高等教育まで受けている人であれば、ごく普通にフランス語を話しています。また、高校まで地元にて、大学からはフランスに来る学生も多いです。私はフランスに住んでいたときに、グアドループ、マルティニーク、レウニオン、ギニアからやってきたという友人が多数おりましたが、こうした人々は、文化や習慣がフランス人と違うところは多々ありますが、市民権という観点から見ると、アフリカやマグレブからくる移民とは異なり、フランス本国に比較的容易に受け入れられており、フランス人と同等の市民権を持って生活しています。さらに、こうした地域の出身の作家もいます。例えば、マルティニークの有名な詩人、エメ・セゼールはその例です。エメ・セゼールは詩人でもあり、また、政治家でもあったのですが、その作品、またその政治的姿勢は一貫して、植民地主義への抵抗、批判にありました。2006年には、ニコラ＝サルコジとの面会を拒否したという有名な話があります。フランスとの結びつきにおいて、これらの国は非常に複雑な関係にあることが分かります。

1.3. アフリカ地域

今度はアフリカ地域に目を向けてみましょう。「フランス語圏世界機構」の調査によれば、フランス語話者の55%がアフリカにいらつて言われています。フランス語話者の過半数がアフリカにいらつてということになりますが、アフリカは大きな大陸ですから、アフリカに行けばどこでもフランス語が通じらつていうわけではありせん。アフリカで、フランス語を公用語としていらつる国は、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国、コートジボワール、ブルキナファソ、カメルーン、ニジェール、セネガル、マリ、チャド、ギニア、ルワンダ、ブルンジ、ベナン、中央アフリカ、ガボン、コモロ、ジブチ、チャド、マダガスカルです。この中で中央アフリカやコンゴはベルギーが関わらつていらつますが、それ以外は、基本的にフランスの旧植民地です。それから公用語ではないながらも、フランス語がよく使用されていらつる国もあります。みなさんご存じだと思はつますが、アルジェリア、チュニジア、モロッコ、モーリシャス、モーリタニアです。

1.4. アメリカ大陸

アメリカ大陸ではフランス語の影響が比較的少ないのですが、それでもいくつかフランス語圏があります。まずは、カナダです。カナダのケベック州のフランス語というのはとても特殊です。学校や役所などのような公的な場面で使うフランス語というのは、非常に本国のフランス語に近いのですが、普通にケベック州の街中で、あるいは家族同士が話しているフランス語というのは、語彙も、音も、全然違います。

【映画の一部分を投影】

この映画の一部をご覧になってもお分かりのように、『本当にフランス語なのだろうか』と感じてしまうほど、違ったフランス語を聞くことが出来ます。実際フランス人に尋ねてみると、『いや、カナダのフランス語は分からないから、字幕を見て理解するよ』と言うくらいです。そのほか、カナダでは、オンタリオ州、ニューブルンズウィック州、さらに、アメリカのルイジアナ州にあるいくつかのコミュニティでもフランス語が話されています。これは小さなコミュニティの単位で、シアックとよばれる、フランス語の普通の形から比べると全然違った変種のフランス語を話しております。

1.5. アジア、その他

インドネシアやベトナム社会主義共和国でも、フランス語が比較的多く話されています。フランス語はこれらの地域の公用語でもなければ第二言語でもないのですが、やはり植民地時代の繋がりからフランス語がよく話されていました。ただし、現在では、フランス語を話せる世代はすでに年老いた世代であって、若者についてはあまりフランス語を話す人はいないかもしれません。

それから中東世界でも比較的フランス語が浸透しています。やはり歴史的な繋がりによるものだと思います。レバノンに留学に行った外語大のアラビア語学科の学生の話では、ヨルダンではかなりの人がフランス語を理解し話すことができると言っていました。しかも、先ほどのカナダのフランス語のように、レバノンでも、フランス語とアラビア語がミックスした変種が存在しているということです。

こうして見るとフランス語の総話者数は2億7400万ということで中国語などの話者に比べて格段に少ないのですが、フランス語が話されている地域というのはやはり広大ですし、そうした地域には、政治的、経済的、社会的に未だに深く

フランスとつながっている国が存在していることから、フランス語はやはり重要な国際語としての地位を保っていることが分かります。

1.6. フランス語の多様性

ここで、フランス語の多様性というお話をしたいと思います。先程も申し上げました通り、フランス語というのは色々な地域、あるいは国に跨っています。しかもフランスの内部でも、南仏訛りとか、コルシカ訛りとか、いろいろと地域によって様々なバリエーションがあります。

ここで、グザヴィエ・ドランの *Mommy* という映画の一部をお見せします。

【映画の一部を投影】

この映画はケベック州の物語ですが、ここで出てくる子供が障害者です。その子供を預かっている施設の教育係の女性は、比較的規範的なフランス語を話しています。ある程度の教育を受けた人が、公的な場所で話しているフランス語であれば、日本で学習してきた規範的なフランス語の力でカナダのフランス語も十分理解できます。ところがこの子供のお母さんは、教育のレベルが低い、庶民の方なのですね。その庶民の話すフランス語はかなりくだけたカナダのフランス語なのです。すると、その教育係の女性が、『あなたはフランス語が分かるのか？』と聞きます。すると彼女は『私はフランス語を話してるわよ、ちょっと訛りがあるけど』と答えるわけです。実際に子供と母親が話しているシーンもありますが、かなり規範的なフランス語とは違います。私は何年もフランス語を勉強していて、フランス映画であれば、字幕なしで理解できるのですが、この映画については字幕を見なければほとんど分かりません。

もう一つの地域的な変種のお話をします。これは南フランスのスペインに近い地域のフランス語ですが、*un de ces jours* を *un de ces quatre* といいます。『近い日のうちに』ということですが、なぜか *quatre* 「4」という数字が使われています。また、母音の発音もかなり違ってきます。語末の母音 *e* の音を最後にしっかり発音するという特徴も聞き取れます。

さらに、社会階層的な違いによる様々な変種も観察することが出来ます。フランスというのは非常に言葉を大切にしている国であって、きちんとした言葉遣いが出来るということがその人の教育の程度を示す重要な尺度になっている国です。日本でもそういうところがあるかもしれませんが、日本以上にその傾向が強いのです。人は誰しも複数の異なる集団（フランス人、女性、男性、学生、ビジネスマ

ン、など)に属し、複数のアイデンティティを持っています。一人ひとりの人がその意味で複文化的な存在です。そして、それぞれの集団の中で用いるコミュニティ内の言葉、ーラング・ヴェルナキュレールを状況に応じて上手に使い分けながら、人はコミュニケーションを行っているのです。フランス人もそうです。そうした使い分けがなされるフランス語の変種の中には、当然幼児語もあるでしょうし、若者言葉、職業で用いる業界用語などもあるわけです。

また、媒体の違いという観点から見ると、『書き言葉』と『話し言葉』の違いがあります。書き言葉では、tu as mangé?「食べましたか?」と書きますが、これは大体話し言葉では、t'as mangé?と言います。Tu as が短縮されて、t'as になってしまいます。しかも、この短縮形にも地域的なバリエーションがあって、マルセイユあたりだと、「チャモンジェ?」という風に発音されてしまいます。

さらに、文体的な違いがあります。これは先程の社会階層的な話者のカテゴリーの違いとは別の多様性です。同じ人でもインフォーマルな文体とそれから丁寧な文体を使い分けています。インフォーマルな文体と丁寧な文体を見分けるためには、いろいろな指標があるのですが、例えばどんな代名詞を使っているか。nous を使うか on を使うか。それから語彙の選択ですね。どんな語彙を使っているか。voiture「車」に対して bagnole と言うとかなりインフォーマルです。ちなみに「大きい車」と言う場合に、grande voiture と言うと普通の表現なのですが、grosse bagnole と言うとすごく砕けた表現になります。友達同士で、「でっかい車」という感じでしょうか。日本語だと『車』というしかないのが、あまりうまく訳せないのですが。それから省略の頻度。インフォーマルな文体ほど、省略が多く起こるということがよく指摘されております。

さて、以上が本日の第1部のお話でした。フランス語と言っても、いろいろなフランス語があるということが、分かって頂けたでしょうか。そのフランス語の多様性については、皆さんがフランスに旅行に行かれたり、フランス語の映画を見たりして、生のフランス語に触れているうちに、だんだん見えてくるのではないかと思います。教科書にはなかなか載っていないフランス語ですので、みなさんぜひ、そういうところにも気を配ってフランス語を観察して頂きたいと思います。

2. フランス語からみた現実世界

ここからはちょっと言語学的内容に入りますが、『フランス語から見た現実

世界』、それから『フランス語という現実世界を切り取る視点』というものについて話をしていきたいと思います。ここからフランス語の例が多くなります。

その前に、フランス語を学びたいと思っている方にご紹介しておきます。東京外国語大学の『言語モジュール』というのがあります。これは無料で勉強することができるサイトで、非常にインタラクティブに勉強することができます。ぜひご覧になってください。(http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/fr/) 発音モジュールの実践編では、実際に発音された音を聞き取って繰り返して発音練習することができます。また、理論編ではフランス語の音韻体系について説明を読むことが出来ます。また、会話モジュールではフランス語の会話の挨拶をいろいろなシチュエーションごとに様々な方言で聞くことができます。

さらに、文法モジュールでは、文法の問題が実際にオンラインで回答できて、即座に採点もしてくれるという、とても勉強に役立つ作りになっています。よろしければぜひ日ごろの自主学習にお使い下さい。

2.1. フランス語の特徴(音声面)

本日は、フランス語を知らない方もいらっしゃると思いますので、まずはフランス語の特徴について簡単にざっと紹介したいと思います。

まず、フランス語の音声面での特徴で最初に挙げられるのは、フランス語の母音の数の多さです。フランス語の発音の難しさの一つの原因として、日本語にはない母音の数が非常に多いということがあると思います。

フランス語の母音の数は 16 個あります。日本語は 5 つなので、それに比べると、3 倍以上の数の母音を発音しわけたり、あるいは聞き分けたりしないといけないわけです。子音は他の言語と大体同じくらいで、17 個から 18 個あると言われております。

それから、英語とフランス語を聞き比べたときに、英語はストレスアクセントが語の中に置かれるのですが、フランス語の場合は、なだらかにいくつかの語のグループがひとまとまりで発音されていきます。フランス語は個々の語にアクセントを置くのではなく、文を意味や文法のまとまりで区切り、リズムグループを作って発音していくのです。日本人がフランス語を発音するときに、ついぼつぼつと切ってしまう癖があるのですが、できるだけ意味のまとまりでなめらかにまとめて、一気に発音するようにすると思います。その際に『アンシェヌマン』という現象が起こります。enchaînement「連続」という意味ですが、意味的

に緊密に結びついた語というのを連続的にまとめて発音することです。ですからこれも、il・a・cinq・ans という風に言わずに、il a cinq ans と言います。ちょっと早めに聞いたら語の境界が分からないので、初級の学習者には、フランス語の聞き取りは非常に難しいと思います。

それからもう一つがリエゾンです。très という単語は、通常は、語末の s は発音しないのですが、後に続く語が母音始まりの場合、その母音とくっついて、発音されなかった s が発音される現象です。これをリエゾンと言います。例えば C'est très utile も「セ・トレ・ユティル」とは言わずに、「セ・トレ・ズユティル」と言います。

2.2. フランス語の特徴(形態論)

さて、次に形態の問題についてお話ししましょう。フランス語学習の第一の関門は動詞の活用です。動詞の活用は実は4つの法、すなわち、①直説法——日常に、実際に起こったことを表すときに用いる法、②接続法——願望や恐れなどの主観的な内容、現実化していないことを言うときに使う法、③条件法——仮定的なことを言うときに使う法、そして④命令法——命令をするときに使う法、の4つがあり、そして3つの時制——現在形、過去形、未来形があります。

さらに加えて、2つのアスペクト——完了と未完了があります。完了形は、avoir＋過去分詞、être＋過去分詞の形になります。

そうしますと、これらのバラエティに応じて活用が増えます。しかも人称によって全部活用が違うので、ものすごく大きな活用表が出てくるわけです。

prendre「取る」という動詞は実際に発音してみるとそれほど多くのバリエーションがあるわけではないのですが、とりわけ書くととなると、全部覚えられないので、非常にその点では厄介な言語になります。

2.3. 動詞の時制

さらに難しいのは、意味の観点から見て、そう簡単に動詞の時制形が1つ1つの時——現在、過去、未来というものに対応していないということです。現在形は常に現在のことを言っている、過去形は常に過去のことを言っていると、決まっていればいいのですが、そういうわけでもないで、それがまた用法の難しさです。例えば、

Si tu étais ici, quel bonheur ! 「君がここにいたら、どれほど幸せだろう！」これ

は実は半過去という時制形ですが、これはいわゆる反実仮想と言われるもので、実際に起こっていないんだけど、『もしここにいたら』、つまり『君はここにいないんだけど、もしいたら』という意味で用いられています。

また、*J'ai une réunion à dix heures demain.* 「明日 10 時に会議があるんだ」では、未来のことを話しているのですが、確定した予定の場合は現在形で言うことがあります。

それから、*Je ne trouve pas de chocolat.* 「チョコレートが見当たらないんだけど」
Ce sera Claire qui l'aura mangé. 「クレールが食べちゃったんだろう」という例は本来過去の事態を表しているのですが、話し手のあくまで、予測でしかありえない事態なので未来形を使っているのです。

以上に見ましたように、フランス語では実際の現実世界の時と、時制の表す時というのは必ずしも常に一致しないということが分かると思います。

2.4. フランス語の特徴(語順)

では続いて、語順について見てみたいと思いますが、フランス語に特徴的な語順というのは、英語などと同じで SVO 構文です。*J'aime le chocolat.* 「私はチョコレートが好きだ」では、*J*というのが主語です。*aime* が動詞で、*le chocolat* というのが目的語。

また、類型論的観点から見ると、フランス語は従属節などの連用修飾語が基本的に主節の後に置かれることが多いです。ただし一部の従属節、例えば *comme* (英語でいうと *as*) や、*quand* 「時」(*when*) は、主節の前に出ることがありますが、その他の多くの連用修飾語は前よりも後ろに現れることの方が多いようです。

連体修飾語というのは、名詞の後に置かれます。例えば関係代名詞節がその例です。ただし、一部の連体修飾語は、名詞の前に出ることもあります。その例というのがいわゆる形容詞です。形容詞は名詞の前に出ることもあれば、実は後ろに出ることもあります。例えばこの *bébé* 「赤ちゃん」の例を見てください。*Ah, c'est un beau bébé.* 「ああ、立派な赤ちゃん」形容詞が *beau* 「立派な」、これは「可愛い」というよりはむしろ「立派な」「体格がいい」という意味です。これは必ず名詞の前に出る形容詞として機能します。ですから *un beau bébé* となります。

泣かないし、よく食べて寝てくれて手が掛からない赤ちゃんのことを形容するには *facile* 「簡単な」という形容詞を使うのですが、これは名詞の後ろに置かれるタイプの形容詞です。*un bébé facile* 「手の掛からない赤ちゃん」となります。

というわけで形容詞であっても、前に出るもの、後ろに出るものの区別があります。以上に見た例は、語彙的に形容詞の位置の区別が出来る例ですが、中には同じ形容詞であっても、前に出るか後ろに出るかで意味が違ってしまう場合があります。

例えば、pauvre は、「貧しい」という意味でも、「哀れな」という意味でも使われますが、名詞の後に置かれれば、「貧しい」という言う意味になります。des hommes pauvres「貧しい人たち」しかし、「かわいそうな」という意味で使うのであれば、pauvre は名詞の前に出ます。pauvre は多義語で、形容詞の位置によって、現れてくる意味に違いが出ると考えることが出来ます。

2.5. フランス語の特徴(統語論)

では、次にフランス語の特徴を統語論的な観点から見ていきます。まず、名詞、冠詞、形容詞は、「性」と「数」のカテゴリーを持っています。したがって、「女性形」「男性形」「単数形」「複数形」があります。

ここでは、「性」と「数」の、とりわけ「数」の方にちょっと着目してみますが、これも日本人が論理的に考えてどうも納得が行かないということがたくさんあります。現実世界の「複数」と、フランス語から見た現実世界の「複数」が食い違っている例を挙げましょう。Plusieurs employés ont une voiture.「何人もの雇用者が車を持っている」。この文を日本人が見てしまうと、人は複数いるのにも関わらず、車が一台しかないので、「あれ？ もしかしてこれ 1 つの車をみんなで共有しているのかな」と思うのですが、ごく普通に解釈するなら、「みんなそれぞれが車を持っている」という意味になります。

逆に les vacances という語では、みなさんバカンスと言いますが、1 つの休暇であっても複数形です。あとは les toilettes もなんで複数なのかは分からないのですがやはり複数形です。

実際に 1 つあるものが単数、2 つ以上のものが複数というのは普通で、大体的な場合はこれでいいのですが、以上に挙げたように、実際には少しずれていることもあります。

今度は、「量」の話です。Il achète du poisson au marché.「彼は市場で魚を買う」この du poisson「魚」の du というのは「部分冠詞」といって、英語でいうと some のような意味で、いくらかの「量」を表すものです。

ところが、Il y a des poissons.「魚たちがいる」というように、des poissons と複数

形にすると、同じ「魚」であっても意味が異なってきます。du poisson というのは、「生きたお魚」というよりも、「魚肉」、「食べるための魚」として意識されてしまうのですが、des poissons と複数形にした場合には、一尾ずつの生きた魚の個体の集合として認識されているのです。

このように、フランス語というのは冠詞が伝えるニュアンスが非常に大切だと言われており、冠詞によって、名詞をどう捉えるかが分かるわけです。例えば café 「コーヒー」、それから thé 「お茶」というのは物質名詞なので部分冠詞を付けるのが普通ですが、実際にカフェ、喫茶店などに入って、注文するときには、「コーヒー一杯」という感じで注文します。その場合にはやはり不定冠詞で、数えられるものとして表現することができるので、この時には不定冠詞を付けておかないといけなわけです。また、お客さんに「コーヒーか紅茶どちらになさいますか」と聞くときにも、いきなり café ou thé ? とは言いません。必ず un café ou un thé ? と聞きます。その際、この un は絶対に必要なものになります。

フランス語では、物質を表す名詞であっても抽象名詞であっても、単数形になったり、複数形になったりできる点で、英語の物質名詞とは異なっていることが分かると思います。ある名詞を「連続体」として「切れ目のない全体」として見るか、あるいは「個別かされた一つの対象」として見るかという点では、語彙の制約よりも、話者がその時どう捉えるかという選択の方が重要な決め手になっているということです。その点が非常に面白い現象ですが、またそれゆえに日本人にはフランス語の冠詞をマスターすることが難しいのです。

2.6. フランス語の語彙

さて、次に、フランス語の語彙について見てみましょう。ここでは、泉邦寿の研究（泉 1978）を紹介します。étudier 「勉強する」と apprendre 「学ぶ」という動詞の意味の違いについての研究です。これらの動詞は、共に「勉強する」「学ぶ」という意味を表していますが、微妙に意味が違います。その違いを知るためには、実はこの語彙の使われる文法的な構造というものに着目する必要があります。apprendre は、前置詞と共に不定法を従えます。Il a appris à jouer de la flûte dans une école de musique. 「彼は音楽学校でフルートを吹くことを学んだ」また、接続詞の que と一緒に用いられて、「que 以下のことを学んだ、知った」という意味でも用いられます。例えば、Nous avons appris qu'elle était déjà partie pour la France. 「彼女が既にフランスに発ってしまったことを知った」という表現です。さらに、

それと並行して、J'apprends le français à l'école. 「私は学校でフランス語を学んでいる」

のように、名詞が動詞に続く例があります。こうした構文上のバラエティというのを étudier は持ちません。étudier は基本的に名詞だけを従える用法のみを持っています。Il étudie la philosophie à l'université. 「大学で哲学を研究する」 J'étudie son comportement. 「彼の素行を調べている」。

この構文の取り方の違いというのは両者の意味の違いにも反映されているのです。端的に言うと、apprendre は、étudier に比べて、ある内容やスキルというものを習得し身に着けることを表しているのに対して、étudier というのは自らの専門として努力して深めていくという意味を表しています。泉の言葉を借りますが、「Etudier というのは技術、学問、事柄に関する知識を組織的に獲得するための努力や意志の実行を示」しているのに対して apprendre は、むしろ「結果を表す」のだそうです。

実際に同じ名詞を取るものであっても、意味の違いというのは微妙に反映されています。例えば、以下の例では、la cuisine française 「フランス料理」という全く同じ目的語を従えてはいるのですが、両者の間に意味の違いが観察されます。Il a appris la cuisine française. 「彼はフランス料理を学んだ」

J'étudie la cuisine française. 「私はフランス料理を勉強している」

a appris を使った場合は、フランス料理の作り方を実際に覚えていく、自分のものにして覚えて、自分でフランス料理が作れるようになっていくという非常に経験的な知恵を身に着けていく感じです。一方、étudie を使った場合は何を習得したかということが目的ではなくて、フランス料理を研究して掘り下げていくという意味になります。つまり、料理研究家が料理を極めるというニュアンスで使われているわけです。このように、文法の構文とそれが表す意味とを突き合わせてみることによって、語彙の持つ微妙な意味を分析的に見極めることが可能です。

2.7. 会話の文化(ケルバ・オレキオニの研究)

言葉の構造について今まで話してきましたが、言葉の使い方というのにも着目しなくてはなりません。それを言語学では「語用論」というという分野で扱っています。まさに読んで字のごとく、「語を用いる論」という風を書いて語用論なのですが、この語用論的な観点から見て、また実に、日本とフランスの文化の面白い違いが見えてきます。

例えば、日本人は「すみません」をたくさん使います。人の前を横切るときも「すみません」。エレベーターで自分が遅れて入っても「すみません」。ちょっとした自分の行為について、「相手に対して申し訳ない」ということを示す表現を使うというのは、日本はすごく多いのですが、じゃあフランス人がこれに対して *Désolé* 「すみません」という言葉を使うかということ、あまり使わないのです。自分に非があればもちろんこの言葉を使って謝ります。例えば、自分が実際に待ち合わせで遅れたりすれば、自分に非があるわけですから *désolé* と言います。しかし、ただエレベーターに乗り込んだ時に、扉を閉めないで、待ってくれていた人に対して *désolé* と言って乗り込む人は、誰もいないわけです。

というわけで、「すみません」と謝ることは非常に日本では頻繁にあります。これは一体どうしてなのだろうと、ゼミの学生と話をしていたところ、学生が面白いことを言いました。「『すみません』と *désolé* はやっぱり言葉的には同じ「詫びる」という行為を表しているのでしょうか。ただどんな状況でその行為を行うかが日本とフランスでは違うのだと思います」と言うんですね。恐らく日本人はエレベーターで場所を開けてくれ、待っているという行為を自分が相手にさせてしまったことを、「迷惑を掛けてすみません」と思っているのです。ここにも言葉通して文化の違いというのが見えています。確かに日本人は「迷惑かけちゃいけない」と、迷惑をかけることに対して細心の注意を払って、それを避けようという文化がありますので、そのために、実際には迷惑かかっていないかもしれないような状況でも、とりあえず「すみません」と謝ることが相手に対する配慮になるということではないでしょうか。

逆にフランスにはそういう感覚はないですね。みなさんの記憶に新しいと思いますが、シリアで人質が亡くなったときに、様々な議論がありました。その中で、「迷惑をかけて」とか「自己責任」いったコメントが多数ありました。この議論はフランスの Canal+ というケーブルテレビのインターネットの記事でも大きく取り上げられていました。「この『迷惑』というのは一体何なのだ」とフランス人の間で大騒ぎになっていました。フランス人の感覚ではこうしたことは「迷惑ではなかった」ということだけなのですが、その時に非常に言語的に面白かったのは、「迷惑」という言葉をフランス語には訳せなかったために、その Canal+ の記事では *meiwaku* とそのまま日本語をフランス語に借用する形で書いていたことです。「迷惑」をかけてすまないという表現はフランス語にもありますが、(*Désolé de vous déranger*)。そのような表現で問題になるようなフランス語にお

ける「迷惑」の概念と日本語における「迷惑」の概念はおそらく、文化的にかなり異なっているのではないかと思います。

語用論のフランスでの専門家にケルバ・オレキオニという研究家があります。その研究の中に日本文化とフランス文化を比較している部分があります。日本人は相手が話し始めたところに自分が話を始めるということは少なからず失礼にあたりますから、極力相手の言葉が終わるのを待ってから次の話を始めます。ですから会話のターンごとに間が生じます。しかし、フランス人は沈黙を嫌います。彼らは沈黙を嫌うので、とにかく、間を開けずに話を繋ごうとして、二人の対話者が同時に話してしまうと場面が多いのです。また、相手の話が終わる前に自分の意見を言い始めるということもよく起こることで、それはフランス人にとってはあまり問題にはあたりません。とにかく沈黙してはいけけないので、我先にと沈黙を消そうと話すわけですね。そのために話が重なっても構わないわけです。

それからもう一つ、オレキオニが指摘していることですが、アイコンタクトの問題があります。フランスでは、アイコンタクトは、嘘をついていない、誠実に話をしているということの表明です。目を逸らしていると、嘘をついているか、やましい思いがあるという印象を与えます。ところが逆に日本では、がんをつけるとか、不躰になってしまうとかという場合がありますよね。お友達同士であまり目を逸らすということはないかもしれませんが、ちょっと改まった機会では、あまり不躰に相手を見てはいけけないという文化的な振る舞いの違いがありますので、実際に目を合わせることはフランス人に比べて少ないのだそうです。実際、アイコンタクトの時間を調べたところ、日本人は全体の会話のうちの 13%しか相手の目を見ていないそうです。しかし、大体欧米社会は 30%くらい見えています。さらに、ブラジルでは、55%で、会話をしているときの半分以上、人の目を見て話をしているそうなのです。

こうした文化的な振る舞いの違いについてはまだまだいろんな面白い話があります。私はフランスで日本語を教えていました。フランス人の学生に、ビジネス日本語を教えるコースの担当をしました。ある時、私は課題を出しました。「あなたは、日本の会社に勤めています。ある時どうしても一週間休みを取らなくてはいいけないという状況が出てきました。その休みを取る許可をもらうために、きちんと理由を述べて、丁寧に上司にお願いをしてください」という課題です。学生が「はい、できました」と言うので、「じゃあ前に出てきてやってみて下さい」と言いましたら、「子供が水疱瘡で」くらいはいいのですが、びっくりしたのは、

「僕の大切にしていた犬が死んでしまいましたので、一週間休みを頂けますでしょうか」と言うのです。これは日本人の目から見た依頼としては本当に不思議な依頼なのですが、実はフランスでは、そんな理由で一週間休みをもらって違和感はないそうです。実際、ひとグループだけではなくて、ふたグループくらいが「犬が死んでしまったから」という理由でロールプレーをしていました。

また、向こうで日本語を教えていたときに、学生によく質問されたことがあります。それは、『「よろしくお願いします」』というのはどういう意味ですか?」と言う質問です。みなさんフランス人にそう聞かれたら、何と答えますか?何かお願いした時に「よろしくお願いします」というだけではなく、特にお願い事をするわけでもないのに、初めて会って自己紹介をした後で「よろしくお願いします」、別れるときにも「じゃあ、また、よろしくお願いします」と、かなり頻繁に言いますが、みなさんどうやってこれをフランス語に訳しますか?これは非常に難しい。授業に、アメリカ人の学生がたまたま来ていて *Merci par avance*. 「前もってお礼を言います」という風に訳したのですが、フランス人が「それはおかしい」と言うのですね。 *Merci par avance*. という表現は確かに「前もってありがとう」という意味ですから。何となく「よろしくお願いします」に似ているかなという気がするのですが、実はこれを使うコンテキストが必ずしもいつも正しいとは限らないのです。

フランス人は、ではどういうときにこれを使うか、というと、「前もってお願いします」の前に、「お願い」の部分がちゃんとはっきり出てないとまずいようなのです。例えば、何でもいいのですが、友達に、「自分はこういうことが知りたいから」、「コンサートのチケット取りたいんだけど、コンサートのチケットの値段調べておいてくれない?」などというお願いが具体的にはっきり出ていて、そのあとに書くのであれば大丈夫です。逆に言うと、フランス人にしてみればこの *Merci par avance*. というのは、何かはっきりとお願いする内容がない状況では言えないのです。

ところが日本人にはこうしたお願いがはっきりしていなくても、言えてしまう。「まあとりあえずよろしくお願いします」——「はじめまして」と会って、何もお願いしていないんだけど、 *Merci par avance*. に近いような言葉を言ってしまう。お願いはしていないのですが、これからお世話になるから、まあそれに対して「予めよろしくお願いします」ということなのでしょう。

このように、言葉と文化というのは実は密接な関係を持っています。皆さまも、フランス語や他の言語を学んでいるようでしたら、ぜひ楽しみつつ、そうした違いを見つけてみてください。違いを見出し、外国語に反映されるものの見方を、自分自身の物の見方と照らし合わせていくことは、自分自身の見方を相対化させ、異文化を受け入れていくための視野を広げていくカギになるのではないかと思います。

以上で本日のお話を終わります、ありがとうございました。(完)

参考文献

泉邦壽（1978）『フランス語を考える 20 章—意味の世界』白水社

Catherine Kerbrat-Orecchioni（1996）*La conversation*, Seuil

コラム †

パリの町を歩く



サンマルタン運河

・・・＊ ◆—————◆ ＊・・・

私が渡仏していたのは 1999 年冬から 2013 年夏までの 14 年半である。1 年半の留学計画であったが、人生とは奇なるもので、指導教官をはじめ、色々な人との出会いやその貴重なサポートのおかげで、すっかりフランスに長居をしてしまった。滞在のうち、6 年間はパリ、8 年半は南フランスの エクス・アン・プロバンスで過ごした。

パリに住み始めたころ、受けたカルチャーショックの一つが、パリの人々の無類の散歩好きである。当時私はパリの北西部のモンマルトルの丘から 15 分ほど西へ下った 17 区のバティニョール界隈に住んでいた。週末には、近所の友達と連れ立って、よく散歩に出かけた。地図(今ではスマホ)片手に、時計の針を気にしながら、電車かバスでいそいそと目的地めざして移動する東京人の私からすれば、どこへ行くでもなく、何をするでもなく、暇つぶしにぶらぶらと歩く



だけの時間の過ごし方は、最初のころは、徒に体力と時間を消耗しているようにしか思えなかった。だが、一か月もすると、その楽しさが分かるようになった。散歩は私の大切な日課になり、平日も急ぎの用事がなければ、大学から家までメトロに乗らずに歩いて帰るようになった。夕食の後には腹ごなしにモンマルトルのあたりをよく歩いた。パリは実に「歩いて楽しむ町」だと思う。

パリは東京やロンドンに比べて非常にコンパクトな町である。歩こうと思えば一日で、東から西まで横断、もしくは北から南まで縦断することが出来る。また、一つ一つの境界の特色がはっきりしているので、



ちょっと歩くと様々に町の雰囲気が変わる。時間によっても、また季節によってもその様子は変化する。もちろん、治安が良くないところはあるので、そうしたところには足を踏み入れてはならないし、ある程度は常に緊張して行動しないとイケない。まあ、歩きなれているうちに、しばらくすると一体どこが、どんなときに危ないかという勘も身についてくる。

私がとりわけ好きな散歩コースはモンマルトルからコーランクルの境界、サンマルタン運河近辺、マレー地区からヴォージュ広場、ビュット・ショモン公園、などである。モントルガイユ通りも好きでよく歩いた。散歩の道すがら見つけた居心地がよくてコーヒーの美味しいカフェ、静かでのんびり本の読める公園、私の好みの映画ばかり上映している静かで小さな映画館、ジャズピアノの聴けるバー、サルサやタンゴが踊れる店、ちょっとした朗読や即興劇をライブで楽しみながら食事のできるレストラン、サン・スルピス寺院の近くの「ことばの博物館」など・・・私のお気に入りの場所が町のあちこちにいつの間にか増えていく。ときには、友達とそれぞれのお気に入りの



場所の情報を交換しあうこともある。また、お気に入りの場所に足しげく通ううちに、最初のうちはそっけなかった店員や窓口の人たちとも、次第に顔なじみになり、うちとけて、世間話をしたりするようになる。町中でちょっと困ったときに、助けを借りたこともあった。パリは、殺伐とした大都会であるが、それでも、まだ人の善意や親切を信じることの出来る町であると思う。

2003 年には猛暑で孤独死が大問題となり、「自分さえ良ければそれでいい (Chacun pour soi)」というメンタリティを多いに批判されたパリの町であるが、それでも同じコミュニティで顔を合わせる者同士の繋がりを築くことはまだ十分可能であるし、そうした繋がりを強くしていくことはこれからますます大切であると思う。そんな近所づきあいの機会になるのが、「近隣祭」(Fête des voisins) である。同じ建物に住む近隣の人たちが、一年に一度、それぞれアペリティフやおかずを持ち寄って、中庭にテーブルを並べてともに食事をしながら交流するお祭りで、もともとはパリ 17 区で 1999 年に始まった試みである。今では全国に広がりつつある。私もフランスにいるときはよくこのお祭りに参加して、同じ建物の人たちと交流した。隣のアパートの人 (子供 3 人を働きながら育てているシングルマザー！) とはお互いの家に招きあって話をしたり、大工道具を貸し借りしたり、子供をお互い預かったり、ちょっとした修理に手を貸しあったりと、何かとお互い助け合ったものだ。



度重なるテロの恐怖、他者への不信感や恐怖心が増している今、日常生活の中でのささやかな営みを通して、住民同士の絆や信頼関係を築いていくことは必要だと私は思う。自分の住む町を大切に思い、よく知り、同じコミュニティの中で生活する人同士が気を配り、思いやって、ともに生活できるよう尊重しあうことが、町を守る一つの力になる。そして、そのことは、パリだけではなく、私たちの住む東京という町でも、どこでも、大切なことなのだろうと思う。

... * ●—————● * ...

フランス語史

Queneau
Leclercq
G.

ロベール・クヱノー
ジャン・レクレルク
ジャン・G.

D

... * ●—————● * ...

(シリーズ) 三修社



東京外国語大学出身のフランス語学者のグループ「セメイオン」の個々の研究成果をまとめて、フランス語学の本としてまとめたシリーズ。第1巻「フランス語学の諸問題」(2001年)、第2巻「フランス語を考える」(1998年)、第3巻「フランス語を探る」(2005年)、第4巻「フランス語をとらえる」(2013年)からなる。個々の章がテーマごとに独立した論文となっているので、どこから読みはじめても構わない。フランス語の様々な問題について、フランス語学の専門家が執筆しているので、ちょっと難しいところもあるが、フランス語という「ことば」について深く知りたい人にはお勧めの一書である。またフランス語学の教科書としても適している。

・・・* ◆————◆ *・・・